

佐藤会頭は2月のメディカルジャパン2015 (インテックス大阪・住之江区) に出展していた株式会社 樋原製作所 (堺市南区) をフォローアップ訪問し、代表取締役社長の樋原壽一氏らと懇談を行った。

その中で樋原社長は、「次世代医療システム産業化フォーラムには平成22年に参加。そのご縁もあって、これまでに大阪警察病院の看護師さんのニーズをお聞きして“車椅子に取り付けたまま使用できる点滴ハンガー”を2年かけて開発。既に200台納品するなど、医工連携により新たな分野に進出が可能となった。また現在、東大病院の本村先生と連携して、心臓外科などでも利用できる“垂直接線運針可能な内視鏡下用ポートタイプ持針器”の開発を進めている。既にプロトタイプは完成したが、今後の課題は軽量化、先端部分のディポーザル化、そしていかにコストダウンできるかだ。この持針器の試作には既に補助金を上回る1000万円を投資しているが、商品化にあたってはさらに億単位の資金が必要となる。」と今後の課題についても説明。このほか歯科技工用粉末飛散防止ケースなどを開発してきた製造現場を自ら説明役となって案内した。



「佐藤会頭(左) に内視鏡下用ポートタイプ持針器のプロトタイプを手に説明する樋原社長(右)」



「内視鏡下用ポートタイプ持針器を手にとり、動作環境を確認する佐藤会頭(左) と宮城専務(右)」

また同社長は、「当社は昭和35年にヤンマーの部品専門工場として創業。リーマンショックなど景気の変動で加工賃が75%以上減るような艱難辛苦を度々受けてきたが、そのたびに良い方に巡り合って今日までたどりつくことができた。現在では大手企業の厳しい納品条件などをクリアする努力で実力を蓄え、高精度切削加工技術を駆使した開発・提案型企業として生き残ってきた。その意味ではそれなりの存在価値があると自負している。例えば大手企業で開発に携わる若手エンジニアは、難しい図面を書いてしまうことも多々あり、開発をお手伝いする過程で工程や部品を減らすことでコストダウンできるような場合は遠慮なくそうしたアイデアを提供してきた。シャープの液晶ラインで必要な部品製造のノウハウも全て提供してきた。当社の強みは全て自社内で加工・開発できる体制を持っていることだ。先般の展示会で佐藤会頭から、海外に出て行かないで欲しいと言われてもらえ、大変嬉しかった。」と述べた。

訪問を終えた佐藤会頭は、「手術の際のドクターの手技を補助する器具や、看護師業務の軽減となると共に患者の安全を保てる製品を手にとって操作してみて、高いレベルの技量を持つ会社だと再認識した。またアメリカのシリコンバレーを視察した話を聞き、日本では良いアイデアを製品化するにはファンドや銀行の後押しがまだまだ不足していると痛感した。これまで言い尽くされた製品化までに資金が枯渇する“死の谷”の話だが、改めてその現実を突き付けられた感じだ。樋原製作所のような会社が日本のモノづくりを本当に支えている会社だ。安定した企業経営が続けられるよう医工連携を通じて自社オリジナル製品を市場に提供してもらえよう大商としても是非支援させて頂きたい。」と感想を述べた。



「車椅子に取り付けたまま使用できる点滴ハンガーにつき説明する樋原社長」



「加工に必要な道具類について説明を受ける佐藤会頭(前列)」



「同社が開発した歯科技工用粉末飛散防止ケース」



「樋原製作所の前で記念撮影。左から3人目が樋原社長」